総合保健科学：広島大学保健管理センター研究論文集
Vol. 28, 2012, 1-8

原　著

発達障害に関する理解と認識
― 大学生意識調査 ―

岡本　百合[1)]，三宅　典恵[1)]，仙谷　倫子[1)]
矢式　寿子[1)]，内野　悌司[1)]，磯部　典子[1)]
栗田　智未[1)]，小島奈々恵[1)]，二本松美里[1)]
松山まり子[1)]，石原　令子[1)]，杉原美由紀[1)]
古本　直子[1)]，國廣加奈美[1)]，高橋　涼子[1)]
河内　桂子[1)]，山手　紫緒[1)]，横崎　恭之[1)]
日山　　亨[1)]，山脇　成人[1)2)]，吉原　正治[1)]

Knowledge and appreciation of developmental disorder: a survey of university students

Yuri OKAMOTO[1)], Yoshie MIYAKE[1)], Michiko SENTANI[1)]
Hisako YASHIKI[1)], Teiji UCHINO[1)], Noriko ISOBE[1)]
Tomomi KURITA[1)], Nanae KOJIMA[1)], Misato NIHONMATSU[1)]
Mariko MATSUYAMA[1)], Reiko ISHIHARA[1)], Miyuki SUGIHARA[1)]
Naoko FURUMOTO[1)], Kanami KUNIHIRO[1)], Ryoko TAKAHASHI[1)]
Keiko KOUCHI[1)], Shio YAMATE[1)], Yasuyuki YOKOSAKI[1)]
Toru HIYAMA[1)], Shigeto YAMAWAKI[1)2)], Masaharu YOSHIHARA[1)]

Recently, students with pervasive developmental disorder (PDD) / Asperger's syndrome/ high functioning autism increase in campus mental health. It is important for students to understand about them. We examined students in knowledge and appreciation about Developmental Disorder using questionnaire. Students who answered "I know about Developmental Disorder" were 119 (29.9%). Most students knew about Developmental Disorder through TV (46.5%), but many students had little knowledge about Developmental Disorder. So there is need for edification about PDD/ Asperger's syndrome/ high functioning autism.

Key Words: pervasive developmental disorder, university students, appreciation

1）広島大学保健管理センター
2）広島大学大学院医歯薬総合研究科精神神経医科学

1）Health Service Center, Hiroshima University
2）Department of Psychiatry and Neurosciences, Hiroshima University Graduate School of Biomedical Sciences

Ⅰ．はじめに

近年，保健管理センターにおいても，発達障害支援の必要性が高まっている。これまでにわれわれは，保健管理センターを訪れる大学生の二次的障害や幼少時期からの問題の変遷等について報告してきた[1),2)]。背景に発達障害をもち，大学入学後の環境変化や，研究室配属という変化，卒業論文作成や就職活動といったイベントを契機に不適応や抑うつ等の症状を呈する学生も多い。大学という状況下では，家族と離れて一人暮らしをしている学生も多いために，より周囲の支援が重要となることがわかった。発達障害学生の支援を考える際，発達障害という特性からみて，教職員のみならず学生を含めた周囲の理解が不可欠である。大学生は，発達障害についてどのように考えているだろうか？今回の報告では，大学生の発達障害に関する理解や認識の実態を明らかにし，発達障害支援の一つとして，啓発活動の方向性を検討した。また，コミュニケーション能力が重要とされている今，大学生は自らのコミュニケーションについてどのようにとらえているのかを検討した。なお，本論文の要旨の一部は第49回全国保健管理研究集会で発表した。

Ⅱ．方　法

対象は，2011年に保健管理センター担当の教養教育授業である学生生活概論を受講した大学生のうち，アンケート調査に協力が得られた大学生407人である。白紙回答９人を除く有効回答者398人（男子236人，女子162人）を対象とした。対象の平均年齢は18.8±0.9歳であった。方法は，発達障害と摂食障害についてのアンケート調査を配布し，無記名で回答を求め，記入後に回収した。なお，調査の主旨についてはあらかじめ説明し，調査に同意しない場合は，未提出または白紙回答とした。

Ⅲ．結　果

１．発達障害に対する知識について

発達障害について「知っている」と回答した者が119人（29.9％），「聞いたことがある」が202人（50.8％），「知らない」が58人（14.6％）であった。図１に発達障害別の認知度についての結果を示す。知的障害を知っている者が最多で207人（52.0％），続いて高機能自閉症が130人（32.7％），学習障害が122人（30.7％），注意欠陥性多動性障害102人（25.6％），アスペルガー症候群74人（18.6％）であった。知的障害は「聞いたことがある」を含めると367人（92.2％）であり，「知らない」は16人（4.0％）であった。「知らない」と回答した者は，高機能自閉症93人（23.4％），学習障害127人（31.9％），注意欠陥性多動性障害182人（45.7％），アスペルガー症候群188人（47.2％）と半数近くであった。

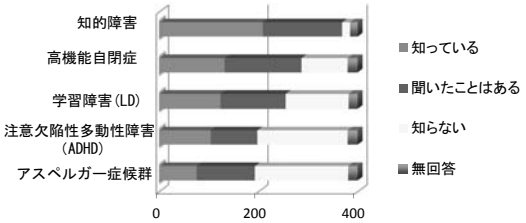

図１．「発達障害について知っていますか？」

発達障害を知ったきっかけについて図２に示す。「テレビ」が最多で185人（46.5％）であった。続いて「講義」が62人（15.6％）であった。

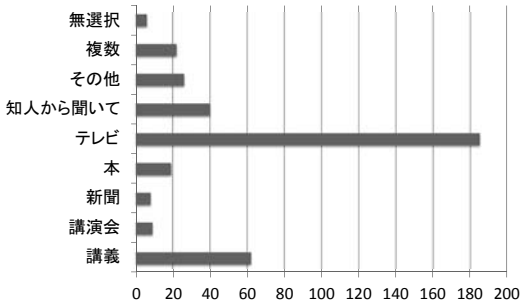

図２．「発達障害を知ったきっかけは？」

発達障害への対応についての結果を図３に示す。「サポートが必要」と答えた者が最多で，334人（83.9％）であった。続いて「薬以外の特別な

治療が必要」66人（16.6%）であった。一方，特別な配慮はいらないと回答した者が33人（8.3%）であった。

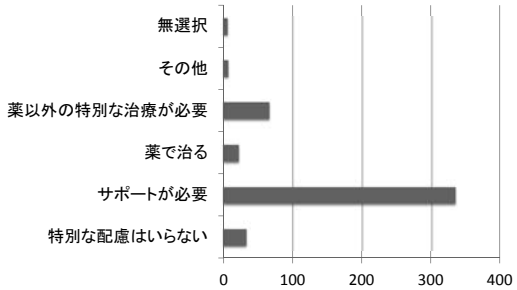

図３．「発達障害への対応について」

発達障害についてどのように思うか？という質問に対しての回答を図4に示す。「わからない」と回答したものが最も多く，143人（35.9%）であった。特に発達障害を知ったきっかけがテレビであったという学生にその傾向が強かった。続いて「個性だと思う」が117人（29.4%）であった。

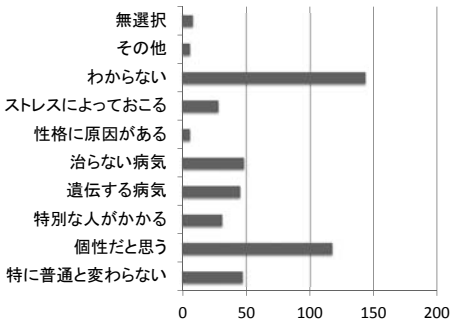

図４．「発達障害についてどのように思いますか？」

２．発達障害の人との関わりについて

「あなたの周りに発達障害の人がいますか？」という質問に対する回答を図５に示す。「いる」と回答した者が74人（18.6%），「いない」が322人（80.9%）であった。「発達障害の人との関わりでコミュニケーションの難しさを感じたことがありますか？」という質問に対する回答を図６に示す。感じたことがある／少し感じたことがあるという回答が197人（49.5%）にものぼった。自由記述では，「関わるのがむずかしい」「攻撃的になると困る」「理解が必要」「知識を得たい」といった回答が多かった。一方，「発達障害の人との関わりで難しさを感じたことがありますか」の質問に対して「わからない」と回答した者の中では，自由記述で「身近でない」「関わると大変」と記述していた。

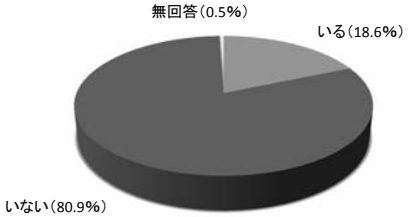

図５．「あなたの周りに発達障害の人がいますか？」

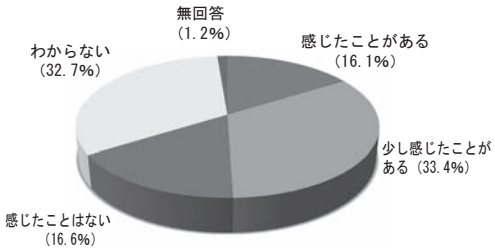

図６．「発達障害の人との関わりでコミュニケーションの難しさを感じたことはありますか？」

「発達障害を理解したいと思いますか？」という質問への回答を図７に示す。「そう思う／少し思う」を合わせて362人（91.0%）であった。表１に示すように，周囲に発達障害の人がいるという回答者に，理解したいという回答が多かった。

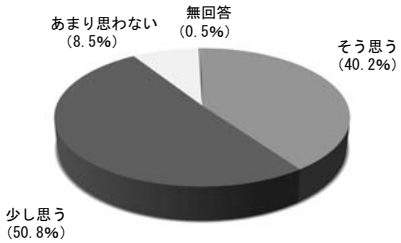

図７．「発達障害について理解したいと思いますか？」

表１．「周囲に発達障害の人がいる／いない」と「発達障害に対して理解したいか否か」の回答の関係

	周囲に発達障害の人がいる	周囲に発達障害の人がいない
発達障害に対して理解したい そう思う／少し思う	72人（97.3%）	290人（80.1%）
発達障害に対して理解したい あまり思わない	2人（ 2.7%）	32人（ 8.9%）

３．自らのコミュニケーションについての評価

「自分はコミュニケーションが苦手だと思うか？」という質問の回答を図８に示す。「コミュニケーションが苦手／どちらかというと苦手」と回答した者が231人（58.0%）と過半数であった。その中で，「実際にコミュニケーションが苦手なことで困ることがある」と答えた者が37人（9.3%）であった。困る場面とは，「友人ができない」，「初対面の人と話せない」，「自分の考えがうまく伝えられない」，「新しい環境になじめない」の順に多かった。

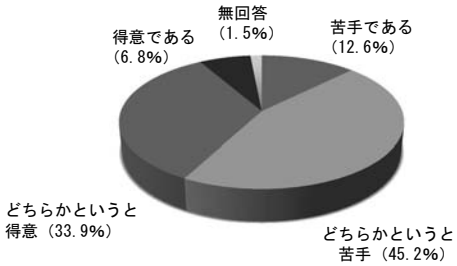

図８．「あなた自身はコミュニケーションが苦手だと思いますか？」

「自分は集団行動が苦手だと思うか？」という質問の回答を図９に示す。「集団行動が苦手／どちらかというと苦手」と回答した者が218人（54.8%）と過半数であった。なお，前述のコミュニケーションの苦手さと集団行動の苦手さとの関係を表２に示す。「コミュニケーションが苦手」と回答した学生で，「集団行動も苦手」と回答した者が156人（67.9%）であった。

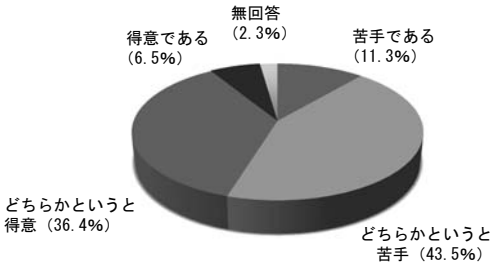

図９．「あなた自身は集団行動が苦手だと思いますか？」

表２．コミュニケーションの苦手さと集団行動の苦手さの関係

	コミュニケーション 苦手／どちらかといえば苦手	コミュニケーション 得意／どちらかといえば得意
集団行動が苦手 どちらかといえば苦手	156人（67.9%）	54人（33.3%）
集団行動が得意 どちらかといえば得意	67人（26.0%）	107人（66.1%）
無回答	7人（3.0%）	1人（0.6%）

なお，「現代社会にコミュニケーションは必要か？」という質問の回答を図10に示す。「コミュニケーションが必要／まあまあ必要」と思っている者が387人（97.2%）にものぼった。「コミュニケーション能力を身につけたいか？」という質問の回答を図11に示す。「強く思う／少し思う」と回答した者が369人（92.7%）にのぼった。「コミュニケーションスキルを身につけたら，どのようになると思いますか？」の質問には，1）対人関係に役立つ，2）学生生活がうまくいく，3）就職に有利の順に多かった。

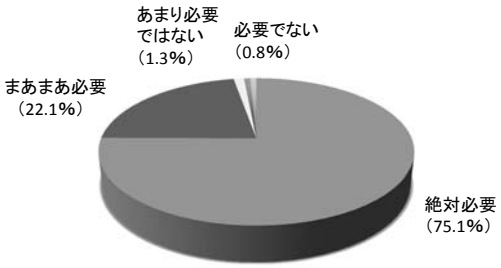

図10．「現代社会で生活していく上で，コミュニケーションは必要だと思いますか？」

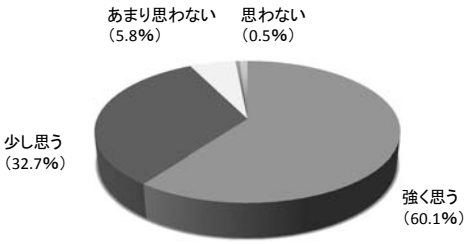

図11.「あなたはコミュニケーション能力を身につけたいと思いますか？」

Ⅳ. 考　察

1）発達障害の支援・理解の必要性について

発達障害は，小児期に診断されることの多い疾患であるが，近年アスペルガー症候群や広汎性発達障害が注目されはじめて以降，特に成人におけるメンタルヘルス問題の背景に，発達障害の存在がある症例が多く報告されるようになった。発達障害に関する一般向けの書物も出版されるようになり，一般の人たちにも少しずつ知られるようになったと思われる。

しかしながら，青年期以降に初めて治療や支援を必要とする発達障害の人は，幼少期にはまだ発達障害がそこまで注目されていなかったが故に，これまで支援を受けずに多くの困難を抱えてきたことが推察される。Tantam ら[3] によると，発達障害の人は，ネガティヴな社会からの孤立体験，特にいじめ体験に遭遇することが多い。それが成人以降の感情面にも影響を与え，気分障害や不安障害などの二次的障害の発生と大きく関係する。杉山ら[4] は，診断が遅れた成人期の発達障害は，二次的障害も強く，被害念慮，社会的孤立，時としてひきこもり，非社会的傾向，時として攻撃的で反社会的姿勢などを抱えるものも少なくなく，対応には大きなエネルギーを必要とすると述べている。また思春期青年期の発達障害は，自己の異質性に気づくことや，他者から阻害されることによって自己評価が低下し，うつ状態に陥りやすいといわれている。内山ら[5] は，アスペルガー症候群における思春期の症状の変容について報告しており，それによると思春期は身体的変化，他者の心への出会い，自己が異質であることの認識，受験や勉強の重圧など，様々な心理的負担が生じやすい時期であり，抑うつ，不安性障害，強迫症状の悪化など多様な精神科的症状が出現すると述べている。われわれの過去の報告[2] でも，思春期に変化がおこった群では，自己が異質であることの認識を持つようになって抑うつ的になる，または対人緊張が高まり，不安が生じるといった例が多かった。

そのため，できるだけ早期に支援につながること，仲間との修正体験ができることが重要であると思われる。そのためには，大学メンタルヘルスにおいても，精神保健スタッフのみならず，教職員や学生を含めた多くの理解が必要不可欠である。

特に大学時代は，教育を受け，仲間体験をする最後の期間ともいえる。ここでよい仲間と出会い，理解のある環境でよい社会関係を培うことができることが重要であると思われる。Tse ら[6] によると，青年期以降になると，自閉症スペクトラムの特徴を持つ人々であっても，他者と社会的なかかわりを持つことに関する関心が高まるといわれている。大学時代の体験が大きな意味を持つと思われ，発達障害をもつ個々の学生なりに，社会的かかわりを持っていけるよう，支援していくことが重要である。

2）発達障害の知識について

今回の調査によると，発達障害を知ったきっかけにテレビをあげた者が最多であった。メディアの影響力を考えると，メディアによる啓発活動は重要であると思われた。しかしながら，メディアをきっかけに発達障害について知ったという学生の中に，「発達障害についてよくわからない」と回答している者が多かった。メディアで得る知識については，ドラマなどが多く，脚色されていたり，ごく一部の特性をクローズアップしている面が多いために，偏ってしまう危険性があるのではないかと思われる。メディアでの啓発活動は，特に誤解されやすい面を明確に伝え，先入観や偏見を持たないような方法をとることが重要と思われた。講義で発達障害を知った学生は「個性だと思

う」と回答する者が多かった。講義できちんと知識を伝えることが効果的であることがうかがわれ，正確な知識の普及が大切であると思われた。メディアで，専門家が偏りのない，まとまった知識をわかりやすく説明する形で伝えるのがよいと思われた。

Hendrickx[7] は，発達障害の対人関係にまつわる周囲の環境について，仲間たちは何らかの憶測をすることになりがちであり（例えば「変わっているから」など），それが活動や仕事を困難にしていると述べている。今回の調査でも，「発達障害の人たちとの関わりでコミュニケーションの難しさを感じたことがある」という回答が49.5％と多く，「発達障害について知っている」という回答の29.9％を大きく上回っていた。つまり，発達障害についてあまり知識を持っていない中で，コミュニケーションが難しいと感じた人が多いことが予想され，発達障害に対する先入観や誤解を生じやすい状況があるのではないかと思われた。発達障害について他の学生が正しい知識を得ることで，個々の特性として理解し，ことができる。さらに，コミュニケーションの困難さについて理解されることで，より仲間関係が結びやすくなることが期待される。

ただし，ここで気をつけておきたいことは，“発達障害”と決めつけてレッテル貼りしてしまう危険と，発達障害傾向のある人は皆同じ特徴を持っている，と考えてしまう危険である。その危険を防ぐためにも，正確な知識の普及が重要であると思われた。

次に，発達障害に関する知識を得ることで，発達障害の学生自身が，自らの特性の気づきにつながることもある。われわれ学生のメンタルヘルス相談に訪れる学生の中にも，発達障害について知ったことで，「自分自身をそう考えると今までの困難さが腑に落ちる」と述べる学生も少なくない。Hentreickx[7] によると，発達障害の人が自らの特徴に気づくこと（self-awareness）は，一般就労と人生における満足および成功体験の出発点とされている。自分自身への気づきから相談へ，そしてさらに自己理解をすすめ，必要な支援へとつながることが望ましい。

3）発達障害の人への対応について

今回のアンケート調査で，発達障害の人との関わりで難しさを感じたことのある者が半数近くおり，「関わるのが難しい」「攻撃的になると困る」などの自由記述が認められた。青木[8] は，心理的，環境的な負荷が加わった時に発達障害的側面が際立ってくることが多く，また，環境の変化（進学，就職，仕事内容の変化，一人暮らし，恋愛など）を契機として，従来の精神障害という表現型で発症することが多いと述べている。われわれの，大学生の発達障害についての調査報告でも，負荷がかかる状況や環境の変化により，発達障害的な側面が際立ったために対人トラブルに発展しており，早期からの支援，介入の必要性がうかがわれた。大学メンタルヘルス支援では，具体的な対応についての相談や介入も行っていきたい。また，アンケートの自由記述では，「理解が必要」「知識を得たい」との記述も多く，具体的な対応についての啓発研修も必要であると思われた。

4）自らのコミュニケーションについて

自らのコミュニケーションについてのアンケート調査では，意外にも過半数の学生が，コミュニケーションが苦手，集団行動が苦手と感じていた。最近の若者は人当たりや愛想がよく，コミュニケーションが得意だと思っているのだと予想していたが，それに反する結果であった。これについては，次のような可能性が考えられた。一つは，一見うまくコミュニケーションがとれそうであっても，実際には自分の伝えたいことがうまく伝えられないと実感している可能性，もう一つは，「理想的なコミュニケーション」というもののハードルが高くなっている（あるいは自分らがそう感じている）可能性である。確かに，「現代社会にコミュニケーションは必要か？」という質問に対して，97.2％が「必要である」と回答していた。いずれにせよ，発達障害の学生にとってはより負担の大きい状況になっていると思われた。

5）効果的な支援のために

杉山ら[4]は，高機能広汎性発達障害青年の転帰を検討し，広汎性発達障害の下位分類による差はなく，早期に診断を受け，支援を受けていた者に良好な転帰が有意に多かったと報告している。早い時期からの支援があれば，二次的障害を回避または最小限に抑える可能性もある。さらに杉山らは，自立に向けては独自の問題が数多くあり，継続的援助を行うことができるシステムが必要であると述べている。これについては，大学保健管理に携わるわれわれが検討すべき課題である。

Wiedle ら[9]は，青年期発達障害の人にインタビューを行い，質的分析をしたところ，95％の者が，同じ発達障害の仲間とのミーティングが有用であったとしている。また，Muller ら[10]も同様の研究で，彼らは孤立感，社会的関係の困難さ，社会や地域に貢献したいという思い等が強く，外的支援（興味を分かち合えるような活動など），コミュニケーションのサポート，社会不安をうまくコントロールする手段を必要としていると報告している。仲間関係を作るサポートを行う際，同じ発達障害のピアサポートや，興味を分かち合える体験，不安のコントロールや，地域社会へ貢献する体験等を中心に考えていく必要がある。

また，大学生においては，卒業後の問題もある。就労支援については，向後[11]や高岡[12]が報告しているが，診断体制の問題もあり，まだ実態も把握しきれていない状況である。一般就労について考察した研究では，職種によって失敗のリスクに高低があり，仕事上の困難への対処，カミングアウトの工夫等が重要であるとされている。卒業後も継続して支援が受けられるように，われわれがうまく橋渡しをしていく必要があると思われた。

Ⅴ．おわりに

大学生を対象とした，発達障害に関するアンケート調査をもとに，発達障害学生への支援について考察した。早期からの，継続した支援を効果的にしていくためには，周囲の理解が必要不可欠であり，そのためには正確な知識を持つべく，啓発活動や研修が重要と思われた。

しかしながら，もちろん，発達障害学生全員に支援が必要なわけではない。支援を必要としない学生もいる。また必要性についても個々によって異なる。誤解を恐れずに言うと，過剰な支援はかえってマイナスになることもある。個々の本来持っている力をうまく発揮していけるような支援を行えるように，保健スタッフとして活動していきたい。

文　献

1）三宅典恵，岡本百合，黒崎充勇，他：大学メンタルヘルスにおける発達障害について(1)－来所動機や二次的障害などの背景について．総合保健科学，27：9-14，2011

2）岡本百合，三宅典恵，黒崎充勇，他：大学メンタルヘルスにおける発達障害について(2)－幼少期からの問題の変遷とレジリエンスの視点からみた支援－．総合保健科学，27：15-22，2011

3）Tantam D, Sorhi G: Recognition and treatment of Asperger syndrome in the community. Br Med Bull 89; 41-62, 2009

4）杉山登志郎，河邉眞千子：高機能広汎性発達障害青年の適応を決める要因．精神科治療学19；1093-1100，2004

5）内山登紀夫，江場加奈子：アスペルガー症候群：思春期における症状の変容．精神科治療学19；1085-1092，2004

6）Tse J, Strulovitch J, Tagalakis V, et al: Social skills training for adolescents with Asperger syndrome and high-functioning autism. J Autism Dev Disord 37; 1960-1968, 2007

7）Hendrickx S: Asperger Syndrome and Employment: What People with Asperger Syndrome Really Want. Jessica Kingsley Pubrishers, 2009

8）青木省三：成人期臨床における広汎性発達障害を考えるにあたって．臨床精神医学37；1511-1514，2008

9）Weidle B, Bolme B, Hoeyland AL: Are peer support groups for adolescents with Asperger's syndrome? Clin Child Psychol

Psychiatry 11; 45-62, 2006
10）Muller E, Schuler A, Yates GB: Social challenges and supports from the perspective of individuals with Asperger's syndrome and other autism spectrum disabilities. Autism 12; 173-190, 2008
11）向後礼子：自閉症スペクトラム障害のある人の就労支援の課題.　精神療法 35；28-33, 2009
12）高岡健：アスペルガー症候群と就労.　精神療法 35；54-59, 2009